

口のユースチームへ所属する。労働ビザ取得とプロ契約を目指していたものの、不運にも右目の網膜剥離を発症してしまう。日本で6度の手術を受けたが右目を失明。そのショックから1年以上の闘病生活を送った後、父の勧めもあって19歳で鈴興に入社した。

「両親や先生はブラジルに渡ることに反対でしたが、最終的に父が会社に借金をして、私を送り出してくれました。



このような形で帰国する事になってしまい、その償いや罪悪感で入社しました」と明かす。

当時、室内喫煙は当たり前で、お酒や麻雀で商談を決めるなど、昭和の体質が残っていた。闘病経験から健康意識が高かった鈴木氏は、そんな文化の変革を決意し、分煙化と健全な商談を推進した。「目を追うことに償いの精神から会社を守っていくという責任

感に心境が変化をしていきました」と語る。

30歳で専務に就任してからは、事務作業をシステムで効率化し、捻出した時間を社員教育に充てた。「社外の営業セミナーや、全国でおこなわれる商業展示会に積極的に参加をしてもらい、文化を変えていきました」と振り返る。

同社では、企業理念に「人間尊重、相互信頼、共存共栄」、経営理念に「客信社事」を掲げている。「客信社事」は、顧客・信頼・社会貢献の三つを満たしたとき初めて仕事をもらえる、という意味が込められており、鈴木氏は「社内でも輪をつくり、仕入れメーカー様とお客様とも輪をつくる。思いやりとおかげ様の精神、礼儀作法を常に心に留めています。どんなにAIや自動化が進んでも、結局イニシアティブを取っているのは人であり、ビジネスは人対人である事実は今も昔も変わりません」と解説する。同社の朝は全員でのラジオ体操と掃除、朝礼という流れを創業から54年間続けている。

自動車業界のEV（電気自動車）シフトへの対応や、物流の2024年問題対策、物流コストの上昇の価格転嫁など課題は山積みだ。「お客様が必要としている商品の入出荷など、自動ではなく、実際に人が行わないといけない仕事はまだたくさんあります。

製造工程で使う材料やエネルギーの供給はどんなときでも遅延せずに続かなくてはなりませんので、さらなるサービス向上を目指していきます」と決意を新たにす。

鈴木氏は「事業を持続可能な形で行うこと」が「客信社事」の一つである社会貢献だと言う。そのために年3回の賞与や個々のスキルに応じた報酬アップ、会社負担での生命保険加入、人間ドックの受診支援など従業員満足度の向上に努めている。また、さらに、災害時の寄付や汚水対策などの環境活動にも尽力している。

そんな鈴木氏が、事業を通じて目指すものとして、「平和」を挙げる。「日本人は本心に思われていて、大体の人は家があるし、3食食べられるし、飢餓状態で路上で亡くなる人の数も圧倒的に少ない。これは世界的に見ても普通のことではありません。現代社会は頭の中が飽和状態になっているため、3食しっかり食べ、十分な休息と睡眠を取る。そんな当たり前毎日の毎日が日々実現し、満足することができれば、現状の領土争いなどの悲惨な争いは減り、平和に近づくと信じています」と訴える。

そして「いきなり大きなことはできませんから、まずは社員自身の心身の健康を大事にすることから始めています」と足元から平和の種を撒き続けている。

社員の健康を大事に 持続可能な事業を



鈴興株式会社 代表取締役社長

鈴木 博彦

1981年生まれ、静岡県浜松市出身。中学校を卒業後、プロサッカー選手を目指し南米ブラジルへ渡航。2年目に右目の網膜剥離を発症し帰国、6回の手術を受けるも右目を失明。ショックから精神疾患を患い、1年以上の闘病生活を送った後、2000年に鈴興株式会社へ入社、2016年から現職。

<http://suzukoh-970.co.jp/>

主に工業用として使用されるさまざまなカテゴリーの商品を取り扱う総合商社、鈴興株式会社が。自動車用アルミホイールや工場向けエネルギー燃料から電化製品まで1000種類以上の商品を扱っている。コロナ禍も成長を続ける鈴木博彦代表取締役社長は、自身の若い頃の闘病経験から「社員の心身の健康を大事にし、事業を持続可能な形で行うことが社会貢献」と語る。

静岡県浜松市は、昔から工業の町、ものづくりの町として知られており、楽器や電子技術など多様な産業が存在する。鈴興株式会社は1970年、自動車用アルミホイールメーカー「エンケイ株式会社」の商社機能会社として、浜松市に設立された。エンケイは、鈴木氏の祖父が創業し、叔父が2代目を継いだ。

「我々のような商社は自ら製品を生み出せないで、仕入先とお客様がいて初めて商売として成り立ちます。職人の商品への愛情を理解し、それをお客様にしっかりとお届けすることが欠かせません。長年、損得勘定を抜きにしたサービス精神や思いやり、人間力を大切にしてきました。従業員全員がそれをしつかり理解していることが一番の強みです」

鈴木氏は中学卒業後、プロサッカー選手を目指してブラジルへ渡り、ブ